

る行為だ。君にそんなことはさせたくない」

「……それでも」

郁は視線を地面に落とした。男の声に含まれる真剣さが郁をたじろがせる。

それでもあたしは。

高校生のときに王子様に助けてもらった。本を守る姿に憧れた。

図書隊に入隊し、ずっと堂上教官の、小牧教官や手塚や隊長の、柴崎の、戦う姿を見てきた。

手塚慧のときと同じだ。教官だったら、どう答える？

いつも揺るぎない背中を見せてくれる。その態度で郁を導いてくれる。郁が困った事態に陥った時には、必ず助けに来てくれる。好きだと自覚はしたけれど、それ以前に、上官として尊敬しているあの人なら。

うつむき地面を見てしまった郁を見て、彼は声の調子を変えた。

「ごめん。泣かせるつもりじゃなかった」

「いいえ、泣きません」

郁は顔を上げた。泣いている場合じゃない。

「あなたにあなたの理想があるように、あたしにも大切にしたいものがあるんです。あたしを守りたいのは本だけじゃない。大切なものを守るために戦うんです」

「大切なもの……」

男が何か言おうとしたとき、鋭い声が男の口を止めた。

「笠原！」

男の背の向こうに見えたのは、上官のいつもの不機嫌そうな顔だ。

「きよ、うかん……」

「何を無駄話してる」

どうしてこの人はいつもタイミングよく現れるのだろう。思わず涙が出そうになり、郁は息をゆっくりと吐いて堪えた。

郁の腕を堂上が引いた。

「医務室はまだだな。さっさと手当をして、巡回に戻るぞ」

「……堂上二正、ですか」

堂上は険しい眉間のまま、男を見据えた。

「笠原はまだ授業中だ。話なら後にしてもらおう」

「はいはい、医務室へ向かって歩きながらなら話してもいいんですよ」

歩き出した堂上与郁に、男が並ぶ。

「彼女がこうして怪我したことについて、上官としてはどう思うんですか」

相変わらずの飄々とした口調に、堂上の眉間にはますますしわが寄った。

「それに答える必要はないはずだが……。とりあえず怪我の手当てが終わったら叱るな」